

## II. 遺跡調査の概要

きたたんば ひがしながれ

## 北丹波・東流遺跡

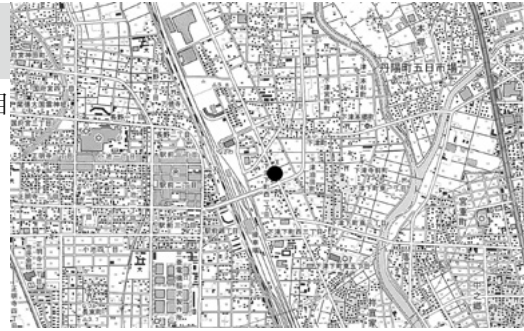
所在地 稲沢市下津丹下田町・下津森町・下津下町西1丁目  
(北緯35度15分6秒 東経136度49分39秒)

調査理由 街路改良工事(都)名古屋岐阜線

調査期間 平成24年10月～平成25年3月

調査面積 2,320㎡

担当者 永井宏幸



調査地点(1/2.5万「一宮」)

**調査の経過** 県道名古屋岐阜線の街路改良工事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、2,320㎡おこなった。調査区は現道に沿って、街路改良部分を対象とした。南北に延びる県道に対して、東西方向を横断する公道などを境に、便宜上A～I区の都合9つの調査区に分けて調査を進めた。

**立地と環境** 遺跡は、遺跡の北東側にある青木川右岸に広がる自然堤防およびその後背湿地に立地する。標高は現況4～5m前後である。遺跡の北方約1kmにある下津蛇池町辺りで、現青木川の分派した旧河川は500mほど南流した地点で大きく西側に屈曲する。この屈曲する左岸に隣接して下津新町遺跡が位置する。下津新町遺跡をまっすぐ南下し、北丹波・東流遺跡を取り囲む広大な后背湿地の北東側を直角に取り囲んで通る岐阜街道は、ちょうど自然堤防と后背湿地の境となっている。

**調査の概要** 調査の結果、古墳時代前期、奈良時代初頭を中心とした古代前半期、平安時代末から鎌倉時代初頭と室町時代後半を中心とした中世、以上大きく3つの時期を中心に遺跡が展開していた。

古墳時代は遺跡の北端と南端から遺構を確認した。北端では、E区で北東から南西方向に延びる幅3m前後、深さ1m超を測る溝が2条平行して、F区で幅2m前後、深さ1mを測る溝が1条、幅4m前後、深さ1.5m前後を測る溝が2条平行して確認した。それぞれの溝間に斑土状の盛土を確認した。出土した遺物から、廻間2～3式の時期と考えている。南端では、南北方向に2条の溝をA区で確認した。

古代の遺構は、ほぼ調査範囲全域で確認した。そのうち、Fa区で確認した南北方向の溝は幅3m前後、深さ約0.8m前後を測る。焼土、炭化物に混じり、「美濃」施印須恵器鉢をはじめ大量の須恵器・土師器が出土した。D区の溝では人名の刻書須恵器が出土している。

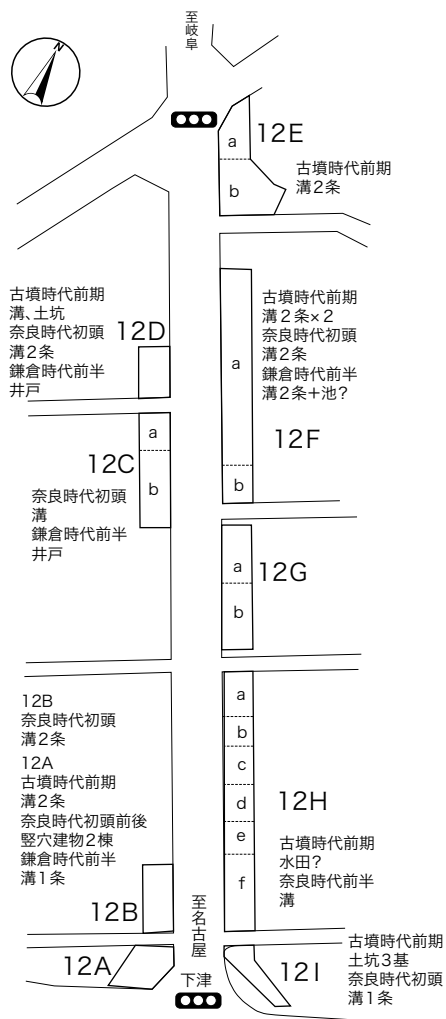
鎌倉時代前半を中心とした遺構は、A区で溝1条、Da区で井戸2基、Fa区で溝2条などを確認した。Da区の井戸は、井戸廃棄に伴う祭儀がおこなわれているようで、井戸枠より下位の基底部に碗皿類と拳大の川原石が敷かれていた。Fa区の溝は東西方向に延びる幅4m前後、深さ1.5m前後を測る大溝であった。一般的な屋敷地を区画する溝ではなく、堀を想起させる規模である。(永井宏幸)



「美濃」施印須恵器鉢



Eb区古墳時代前期溝2条



調査区位置図 1:2,000



Fa区中世の遺構調査状況



Ca区鎌倉時代前半の井戸祭祀

まつぎ かみはまだ  
松崎遺跡・上浜田遺跡

所在地 東海市大田町松崎・上浜田  
(北緯35度1分35秒 東経136度53分44秒)

調査理由 連続立体交差事業

調査期間 平成24年5月～平成24年9月

調査面積 2,100 m<sup>2</sup>

担当者 永井宏幸



調査地点 (1/2.5万「鳴海」)

**調査の経過** 名古屋鉄道常滑線連続立体交差事業にともなう事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、発掘調査を実施した。調査は、平成20年度に実施した08B区西側に隣接して2,100m<sup>2</sup>おこなった。今回の調査区は、国道247号と鉄道高架の交差する以北に展開する松崎遺跡と、C区西側に隣接する上浜田遺跡の間をつなぐ地区にあたる。調査区は全長約270m、幅7～10mを測る。細長い調査範囲のため工程上、北からA・B・C区にわけて進めた。なお、20年度調査地はすでに鉄道の高架が完成し、20年度調査当時、仮設の軌道であったところが今回の調査区にあたる。

**調査の概要** 調査の結果、旧海岸線に形成された砂堆と調査区南西から北西に縦断する街道とほぼ一致することが判明した。この砂堆縁辺付近に古代を中心とした遺構が削平を免れ、貝層を伴う大型廃棄土坑などがみつかった。遺物は、調査地南端のC区南側をのぞくほぼ全域から出土した。古墳時代後半期から古代までの製塩土器をはじめ、古代を中心とする須恵器・土師器が多く出土した。

調査区北半は、名古屋鉄道の軌道により削平され、包含層が一部残る程度であった。当初、遺構と判断していた茶褐色から黒褐色土層は、鉄道造成時に残存し、かつ軌道の重量により沈下した包含層であることがわかった。

調査区南半は、鉄道の軌線による影響が少なかった。旧愛知鉄道により、街道が分断されたあとも、街道の地割りに沿って宅地が並んでいたと思われる。現況の宅地の地割りと表土層から続く宅地の境界が、調査区南西から北東にのびる道路と一致することも裏付けになろう。

街道部分は、厚さ50cm前後、幅5m前後の砂質土と粘質土の互層となる硬化した整地土層が調査区を縦断している。この整地土は版築状に締め固められていた。大正11年の硬貨が土層内にあったことから、愛知鉄道開通後も道路整備が続いていたことを裏付ける。

街道と考えた部分を掘り下げると、近世陶器の混入する堆積層まで互層堆積を確認した。この街道を境に南側は湿地状の堆積層(埋め立てる前は水田として利用していた)がひろがり、現大田川にむかって窪地があったと考えられる。C区南側2/3はこの窪地に相当し、街道を境に段差があったことを地表下で確認できた。つまり、南北方向に延びる砂堆を境に西側は海域、東側は湿地状の低地といえる。この景観は08調査区からの延長であり、街道と湿地の段差によって追認できた。

B区とC区北寄りの砂堆に数カ所、貝層をともなう土坑があった。貝層は焼土や炭化物が混じる。なかでもB区南寄りに検出した貝層を伴う大型廃棄土坑090SKは、3.8×3.3mの不定形、深さ30cm前後を測る。090SKは須恵器などが出土し、奈良時代初期の遺構と考えられる。貝種はハマグリが主体で、ウミニナも含む。貝層のフローテーションを試みたが、環形動物や微小貝類は採取できなかった。090SKの底面近くには馬の下顎骨・肩甲骨などがまとまって出土した。馬の骨は既調査からも同時期の類例が報告されている。

出土遺物は、製塩土器の出土状況から偏差を指摘できる。A区北寄りには知多式1類から4類までが出土、A区南寄りからB・C区北寄りにかけては4類が中心に出土した。つまり松崎遺跡に近い地点は古墳時代の製塩土器があり、上浜田遺跡に近い地点では古代の製塩土器が中心に出土している。製塩土器のほか、奈良時代初頭前後の須恵器・土師器甕を中心に、灰釉陶器、山茶碗、鉄鏃、土錘なども出土している。(永井宏幸)



090SK 遺物出土状態



出土遺物



遺跡全景 (C区を北からみる)

写真手前中央の砂堆と住宅の軸線が一致することに注目。  
宅地左側(東)の旧街道と砂堆縁辺が一致する。

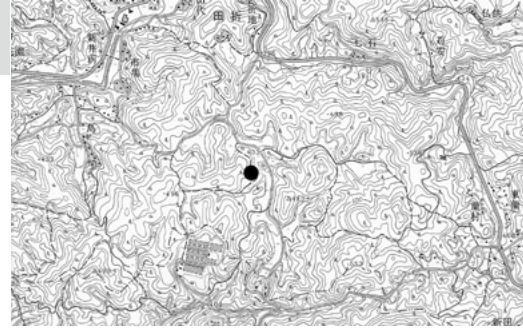


C区の調査状況

砂堆の縁辺部を調査しているところ。

## トヨガ下遺跡

所在地 豊田市下山田代町字トヨガ下  
(北緯35度15分7秒 東経137度14分46秒)  
調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業  
調査期間 平成24年6月1日～平成24年12月28日  
調査面積 3,800 m<sup>2</sup>  
担当者 宮腰健司・武部真木・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

**調査の経過** 調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う発掘調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成24年6月1日～12月28日の期間で実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地などの平場と緩斜面に植林された山林となっており、A区・B区の2カ所に調査区を分けて設定し、調査を行った。

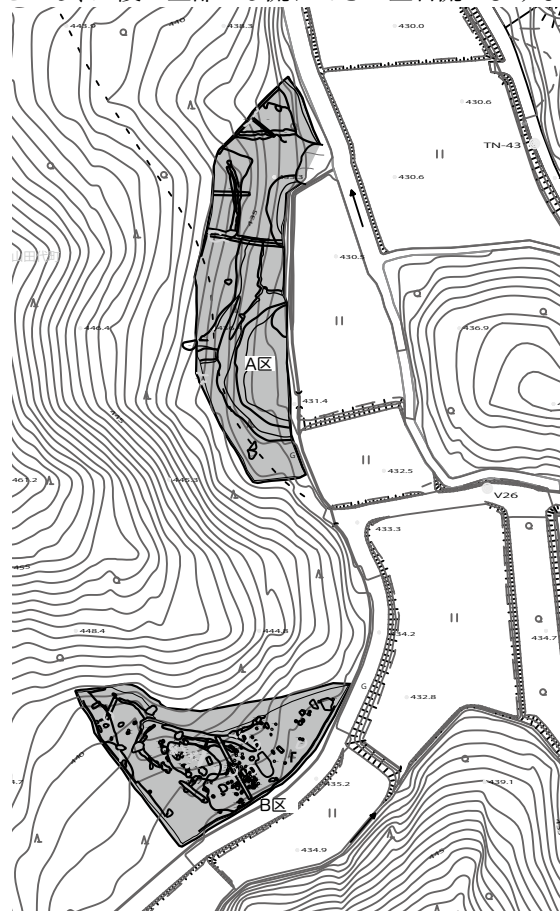
**立地と環境** トヨガ下遺跡は豊田市下山田代地内にて郡界川に合流する沖川の西岸丘陵部に位置しており、A区の東に面して流れる沖川を挟んで東に猪移り遺跡がある。調査地点の標高は432～448mである。

**調査の概要** 調査の結果、A区において縄文時代前半期の流路跡1条、中世から近世にかけての道1条・溝1条、近世後半以後の炭焼窯跡3基を確認した。注目されるのはA区北端部でみつかった縄文時代前半期の流路跡で、泥質凝灰岩やチャートの剥片が出土した。埋土は拳大から人頭大の礫が多くはいる砂礫層であることから、丘陵の上部から流れてきた土石流のような堆積と考えられた。

B区はA区から南へ尾根を超えた側の南向き斜面であり、古代の流路跡1条と古代の包含層(焼土)、中世から近世の溝4条とピット群、炭焼窯跡5基を確認した。古代の遺物では灰釉陶器碗・皿と小瓶、土師器甕などがあり、流路のある谷の上流部から流れてきたものと考えられる。そのほか石器剥片、弥生時代前期の条痕文系土器などが出土している。(蔭山誠一)



調査区全景



トヨガ下遺跡全体図 (1:2,000)



A区全景(東より)



A区010SX(北東より)



B区全景(西より)



B区古代の包含層



B区古代の土坑



B区焼土を含む土坑



B区墨書のある灰釉陶器碗



B区古代流路跡007NR

## いうつ 猪移り遺跡

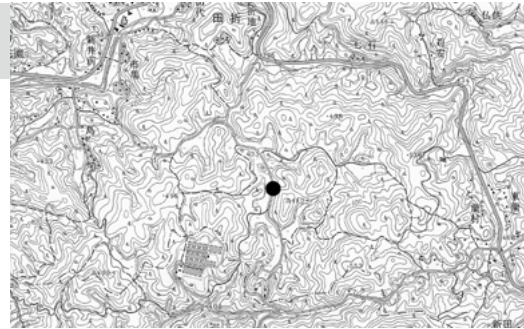
所在地 豊田市下山田代町字猪移り  
(北緯35度1分26秒 東経137度19分13秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間 平成24年5月～平成24年10月

調査面積 4,400 m<sup>2</sup>

担当者 宮腰健司・武部真木・蔭山誠一



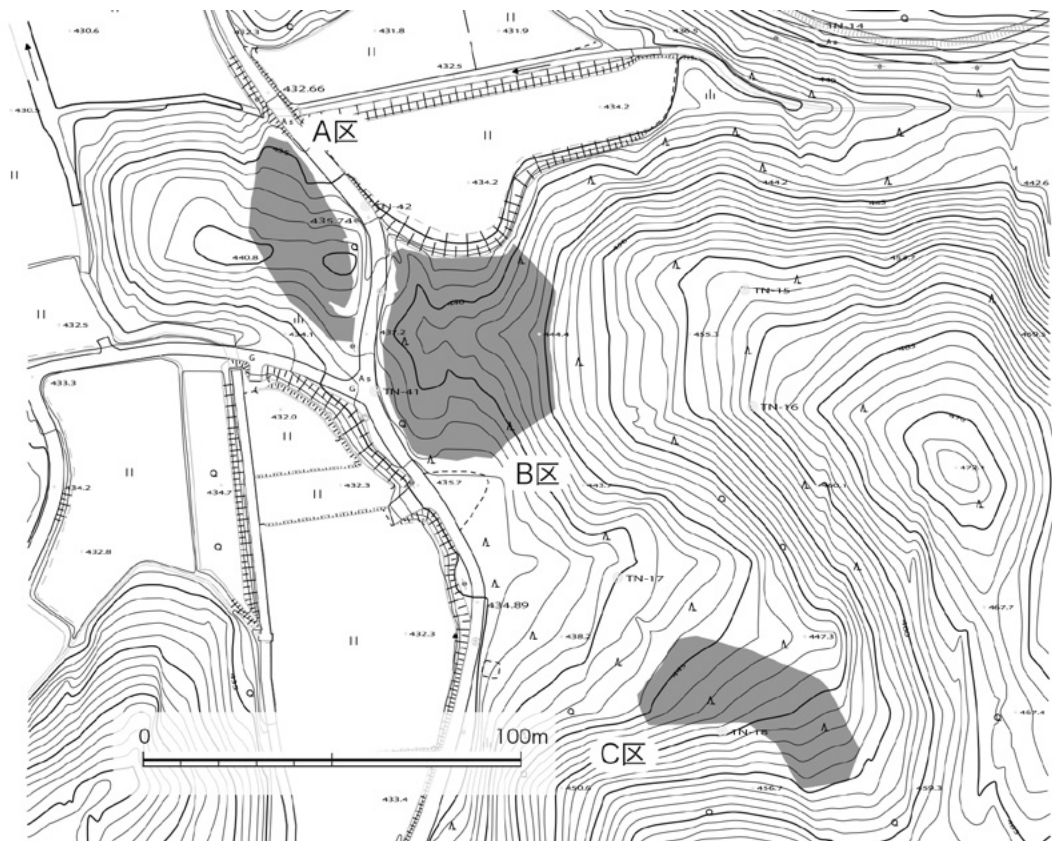
調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

**調査の経過** 調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う事前調査として、愛知県教育委員会より委託を受けて平成24年5月から10月にかけて実施した。調査面積は4,400m<sup>2</sup>であり、A・B・C区の3調査区の調査を行った。

**立地と環境** 遺跡は豊田市域の北東部の丘陵地帯にあり、下山地区を流れる郡界川の支流、沖川の東岸の標高430m前後の丘陵上に立地する。近接してトヨガ下遺跡、柿根田遺跡があり、遺跡東側に続く谷の上流部には蔵平遺跡、栗狭間遺跡などの遺跡が分布する。

**調査の概要** 今回の調査では、地形的に連続するA,B区において縄文時代早期を中心とした多数の遺物が出土したほか、数基の土坑が確認できた。また試掘調査等で確認された平安～江戸時代については、各地区において遺物を採取した。なお近代～現代に操業したとみられる炭焼窯跡については表土掘削作業の前に個別に位置・規模等の情報を記録した。

**A区の遺構** A区では尾根上に土坑(017SK)1基と、北側斜面で土坑2～4基を検出した。017SKの平面形は隅丸方形をなし、長さ3.24m、幅1.62m、深さ0.66mの規模をもつ。石器(剥片)と



猪移り遺跡 調査区位置図 (S=1/2,000)

縄文時代中期後半～後期前半の土器を含む。015SKは長さ1.3m、幅0.76m、深さ0.3mの楕円形の土坑であり、内部に少量の焼土と炭化物、被熱の痕跡のある礫などが廃棄されている。これら以外の土坑は不確実な部分が多く、倒木痕などの可能性も考えられる。遺物は土坑周辺から北側の斜面にかけて分布しており、尾根上で検出したチップ、剥片類を除くほとんどの資料は斜面に二次堆積したものと考えられる。

**B区の遺構** B区においても尾根上で土坑を検出した。024SKは直径約1.0m、深さ0.47m規模の円形の土坑であり、主に凝灰岩質の剥片類が出土した。022SKは径1.16～1.5m、深さ0.7m規模の楕円形の土坑であり、樹木根に攪拌された上層に早期後半の土器が多く含まれる。黒





A・B区全景 (北から)



B区北側斜面の谷状地形 (北東から)



B区全景 (左が北)



B区022SK 完掘状況



異形局部磨製石器 (B区)



A区017SK完掘状況



有舌尖頭器 (A区)



A区015SK炭化物・礫の出土状態



C区全景

色土を埋土とする谷状の地形のうち、やや規模の大きなものが北側斜面に2カ所、南側斜面に1カ所があり、土坑のある尾根に近い北側斜面の谷埋土から石器、早期土器片多数が出土した。それ以外の2カ所の谷からは押型文土器、凝灰岩剥片、石匙、灰釉陶器、土師器などが出土したが、ごく少量である。

**出土遺物** 出土遺物の多くは、A区尾根上からB区谷状地形にかけての範囲に分布し、総数は土器と石器あわせて2,000点以上に及ぶ。土器はいずれも小片ではあるが少量の押型文土器(山形文、楕円文)のほか粕畑式を主体とした早期後半の条痕文系土器が多数を占める。また中期～後期の土器は主にA区に偏在するようである。石器類は草創期の有舌尖頭器(1点)、早期の異形局部磨製石器(1点)があるほか、チャート、凝灰岩、黒曜石を用いた石鏃、スクレイパー、石匙、その他剥片、花崗岩を用いた磨石・叩き石、凹み石、台石などがある。このうち石鏃はA・B区合わせて50点を超える。またA区の尾根上には凝灰岩を主体とした剥片やチップが集中して分布する範囲があり、この付近で石器製作が行われていた可能性が考えられる。

**C区の調査** C区では明確な遺構はほとんど確認されなかった。ただ北向きの斜面に近代以降の炭焼窯跡が多数分布し、調査範囲内では3ヶ所を調査した。石鏃1点のほか、山茶碗、近世・近代陶磁器片が包含層より出土した。

**まとめ** A・B区の縄文時代の遺物の分布状況から、利用範囲は東から西へ延びるやや低い丘陵の先端付近、尾根上の比較的狭い部分に限定される。少なくとも縄文時代早期には断続的に利用されるキャンプサイト的な場所であったと考えられる。(武部真木)

くりはざま  
栗狭間遺跡

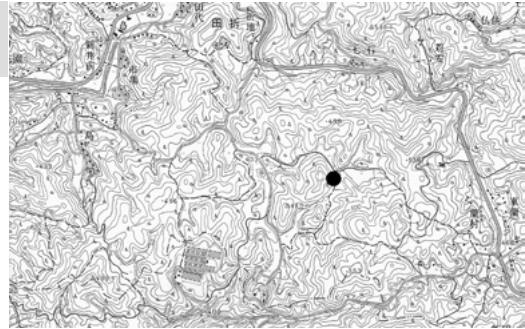
所在地 豊田市下山田代町字栗狭間  
(北緯35度1分26秒 東経137度19分32秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業

調査期間 平成24年8月21日～平成24年12月14日

調査面積 2,950 m<sup>2</sup>

担当者 宮腰健司・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

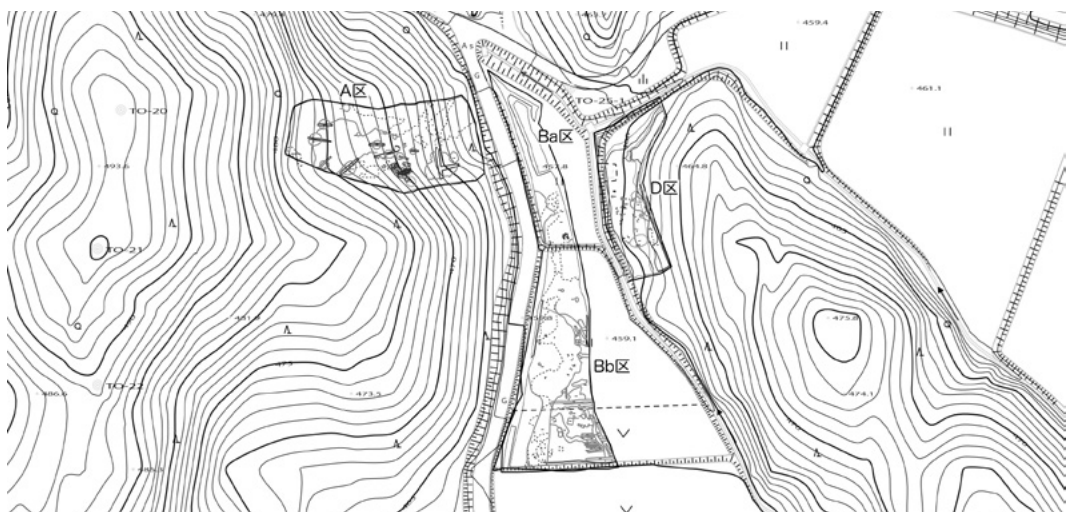
**調査の経過** 調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う発掘調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成24年8月21日～12月14日の期間で実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地などの平場と緩斜面に植林された山林となっており、調査対象地の樹木伐採の進捗状況との関係で、A区・Ba区・Bb区・D区の4カ所に調査区を分けて設定し、調査を行った。

**立地と環境** 栗狭間遺跡は豊田市下山田代町地内にて郡界川に合流する沖川の東岸丘陵部に位置しており、沖川に合流する谷川の上流部にあたる谷部と谷を囲む丘陵部に遺跡が確認されている。D区のある丘陵を挟んで東に今年度愛知県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査が実施された鶴ヶ池遺跡がある。調査地点の標高は456～478mである。

**調査の概要** 調査の結果、A区にて中世～近世の自然流路1条・土坑5基を確認し、有舌先頭器1点・石匙1点・山茶碗等が出土した。Bb区では縄文時代のドングリピット3基・中世から近世の自然流路2条・近世後半期～近代の畝状溝・溝・土坑などを確認し、ナイフ形石器2点・中世から近世の陶磁器が出土した。D区では縄文時代と思われる落とし穴の土坑2基を確認し、縄文時代早期～前期の縄文土器が出土した。近代以降の炭焼窯跡は、A区に12基、D区に2基確認した。(蔭山誠一)



栗狭間遺跡全景 (北より)



栗狭間遺跡全体図 (1:2,000)



Bb区全景(北東より)



Bb区001NR(西より)



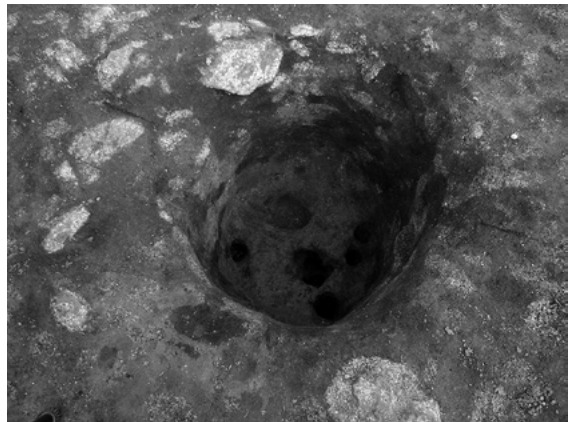
Bb区032SK、ドングリの出土状況(北より)



Bb区033SKの断面(北東より)



D区全景(北より)



D区006SK(北西より)



A区炭焼窯跡009SY(北東より)

## 範囲確認調査 蔵平遺跡

所在地 豊田市下山田代町字蔵平  
(北緯35度1分37秒 東経137度19分13秒)  
調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業  
調査期間 平成24年5月23日～平成24年5月30日  
調査面積 50 m<sup>2</sup>  
担当者 宮腰健司・蔭山誠一



調査地点 (1/2.5万「東大沼」)

**調査の経過** 調査は、愛知県企業庁による豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う範囲確認調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成24年5月23日～5月30日の6日間実施した。調査対象地の現況は旧水田耕作地などの平場と緩斜面に植林された山林となっており、周囲の地形と樹木・岩などの障害物の外れる地点を考慮して、試掘トレンチ (以下「TT番号」で表す) を25カ所設定して調査を行った。

**立地と環境** 蔵平遺跡は豊田市下山田代町地内にて郡界川に合流する沖川の東岸丘陵部に位置しており、平成22年度に範囲確認調査が実施された和倉遺跡の南に隣接する地点である。調査地点の標高は439～462mである。

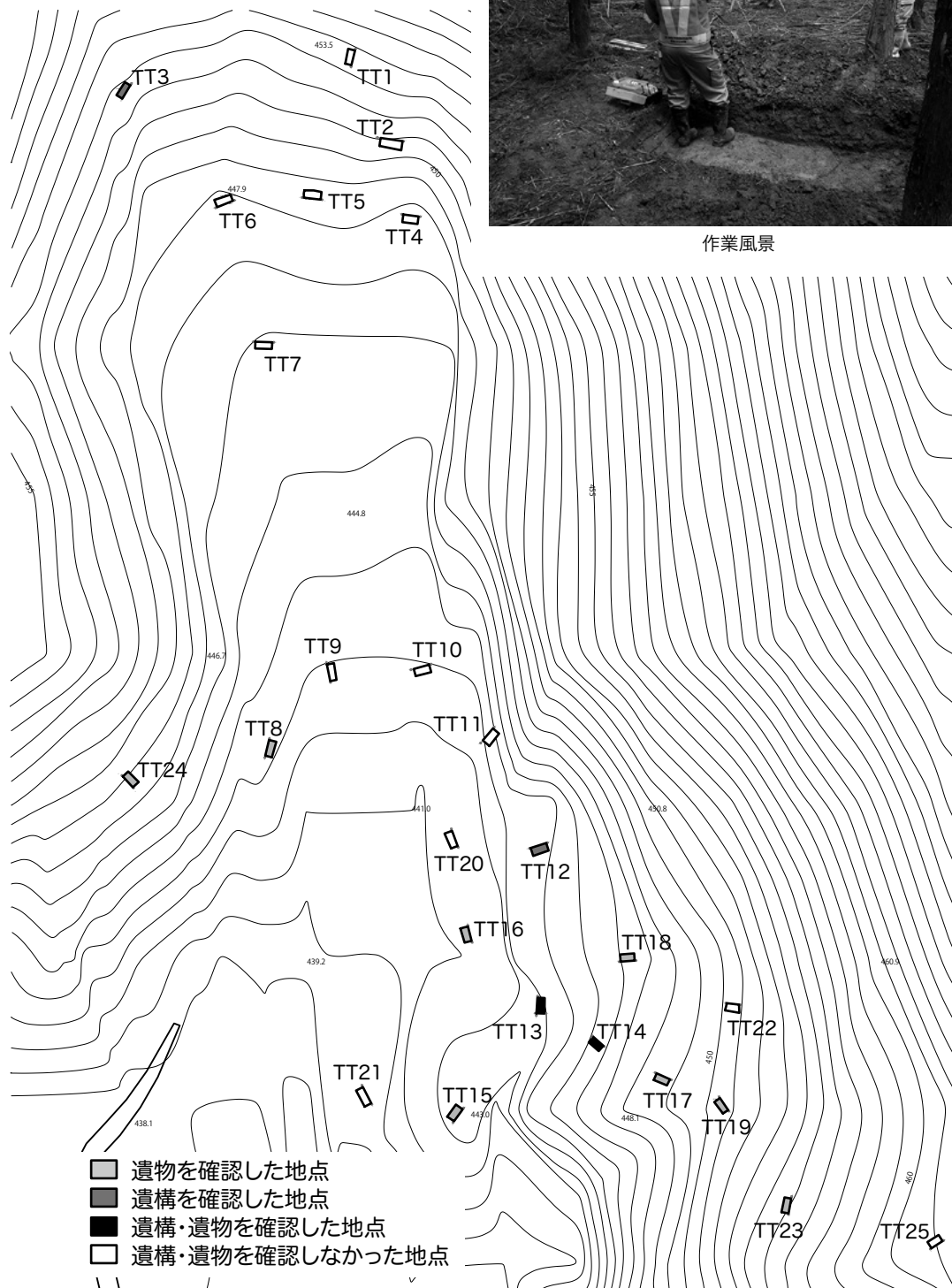
**調査の概要** 調査の結果、調査対象地の丘陵東側斜面にあるTT13・TT14を中心にTT12～TT19・TT22・TT23にて遺構と平安時代の遺物を多く確認できた。その他には和倉遺跡の南にあたるTT3において、炭焼窯跡と思われる堆積とその下部に遺構の可能性のある土坑が確認でき、調査対象地の西側斜面にあるTT8・TT24においても遺構は確認できなかったが、奈良時代から平安時代にかけての遺物が確認できた。以上の調査成果から、調査対象地の東側斜面のTT13・TT14を中心とする地点において遺跡の中心があり、調査対象地の西側斜面には別の遺跡の存在が推定される。調査対象地の北側にあるTT3は和倉遺跡の南端部にあたる可能性がある。(蔭山誠一)



TT12(南より)



TT14(南西より)



範囲確認調査トレンチ配置と成果概要



作業風景

おかやまみなみ

## 岡山南遺跡

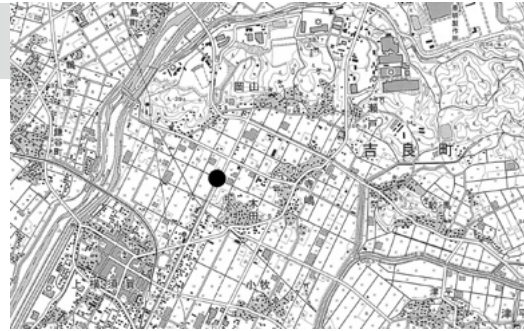
所在地 西尾市吉良町木田  
(北緯34度50分15秒 東経137度4分38秒)

調査理由 道路改良工事 一般県道西尾幡豆線

調査期間 平成24年4月～平成24年7月

調査面積 1,075㎡

担当者 酒井俊彦



調査地点 (1/2.5万「西尾」)

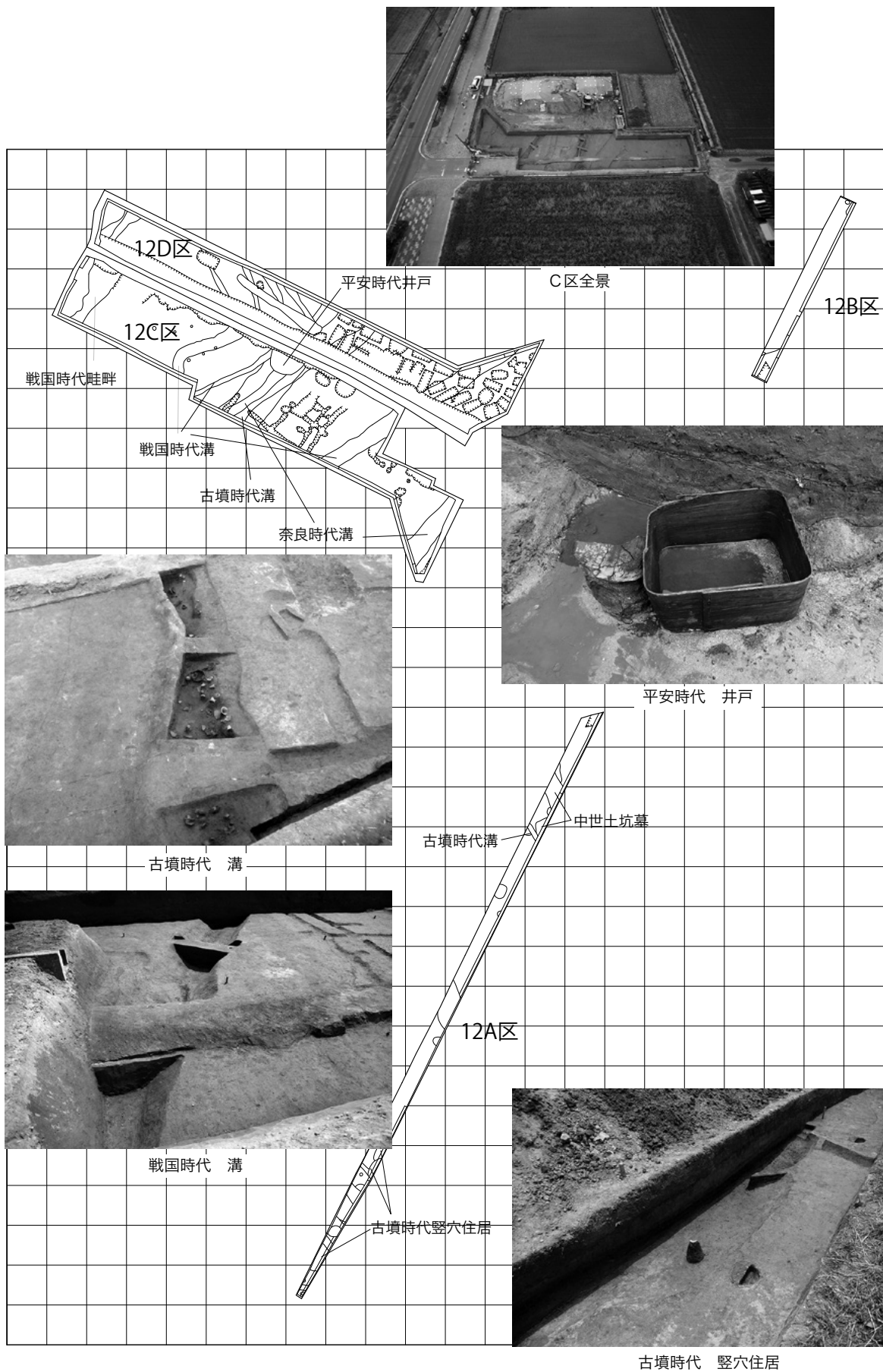
**調査の経過** 本調査は県道西尾幡豆線の改良工事に先立つもので、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて調査を実施したものである。昨年度は遺跡の東半を調査し、古墳時代、古代、近世の3時期の遺構が確認されている。今年度は遺跡の西半の調査を行った。県道用地に南北方向に直行する市道の拡幅部分にA・Bの2調査区、市道西側の県道用地内にC・Dの2調査区を設定した。

**立地と環境** 遺跡は矢作川下流域、古矢作川左岸の沖積地に位置する。現在は平坦な地形であるが、沖積微高地上に立地している。遺跡の北側には三河山地からのびる岡山と呼称される丘陵地帯が存在する。この丘陵上に中根山遺跡、吉良八幡山古墳、若宮古墳群などが所在し、この南側に岡山南遺跡などの遺跡群が分布する。この地域には未調査ながら弥生時代以降の遺跡群が確認されているが、旧吉良町地域の沖積地での調査は本調査が初例である。

**調査の概要** 遺構面は2面存在し、第1面奈良時代以降、第2面古墳時代初頭の遺構が検出された。調査区は沖積微高地上に所在するため大部分は削平をうけ、第1面が消失し、第2面で全時期の遺構を確認した。A区の南端部分は微高地面が下がるため、第1・2面が存在した。

第1面の主な時期として、中世、古代がある。中世の遺構としてはA区で土坑墓が3基確認された。遺物は検出されないが、埋土の状態、遺構の規模・平面形態より土坑墓と考えられる。また、戦国時代の遺構としては、C・D区で南北方向の溝3条、および水田の畦畔の高まりが検出された。溝は並行して同一方向に走り、東側の溝は掘方がやや大きく、屋敷地の区画溝の可能性がある。また、畦畔と水田の落込みが検出された。溝および水田の埋土中より15世紀後半から16世紀前半の古瀬戸施釉陶器、土師器が出土した。平安時代の遺構としてはC区で井戸が1基検出され、井戸枠は平面形が隅丸方形の曲物が最下段のみ確認された。平安時代後期の灰釉陶器が出土している。奈良時代の遺構はC・D区で溝2条が確認された。やや離れた位置でほぼ平行に南北方向に走る。いずれも幅1.5mほどで1回の掘り返しが確認された。出土遺物は少量ながら、完形の須恵器杯等が出土した。性格は不明である。第2面の遺構として、古墳時代初頭の竪穴住居、溝、土坑が検出された。竪穴住居はA区の南半で3棟検出された。古墳時代以後の削平を受け、遺存状況は悪い。溝はA区で東西方向の溝1条、C・D区で南北方向の溝1条を確認した。A区の溝は検出面で掘り込みは浅く、台付甕がややまとまって出土した。C・D区の溝は断面V字でやや深く、遺存状況は良い。壺、甕、高杯などがまとまって出土した。近接して竪穴住居は検出されていないが、出土状況などから集落を巡る溝の可能性がある。この溝は上層の奈良時代溝と同方向で重複しており、地形的関連が考えられる。

今後、県道建設にともなう調査が進行し、資料の増加が見込まれる。近辺の遺跡との関係を明らかにする事が課題である。(酒井俊彦)



よせじま  
寄島遺跡

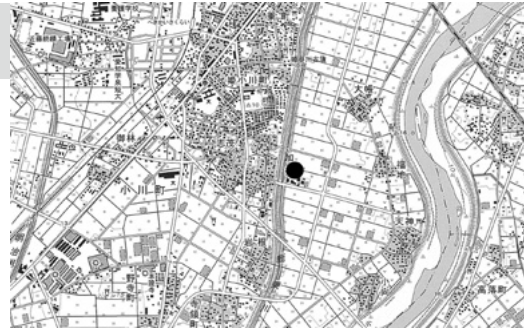
所在地 安城市小川町  
(北緯34度54分29秒 東経137度05分45秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 平成24年9月～平成25年3月

調査面積 3,000㎡

担当者 酒井俊彦



調査地点(1/2.5万「西尾」)

**調査の経過** 調査は中小河川改良事業(鹿乗川)に伴い、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて本センターが委託を受けて調査を実施したものである。本遺跡は平成19年度及び昨年度に調査を行い、今回を含めて調査総面積は8,600㎡である。今年度は、平成19年度調査区の北側に南よりA・Bの調査区を設定した。

**立地と環境** 本遺跡は矢作川下流域、鹿乗川右岸の沖積地に立地する。左岸の碧海台地上には姫小川古墳などの古墳群が展開する。平成12年より本センターが調査を行っている鹿乗川右岸には北から南にかけて姫下、寄島、下懸、五反田、惣作の5遺跡が連続して所在する。鹿乗川は碧海台地東辺を南北方向に直線的にはしり、遺跡周辺は平坦な地形をなす。旧鹿乗川は蛇行して走ることが確認され、惣作遺跡、寄島遺跡で東西方向の旧河道が確認されている。遺跡はこの旧河川の自然堤防上に展開する。本遺跡南端の旧河道南側に古代の集落が展開し、下懸遺跡に連続する。旧河道北側では方形周溝墓と大形の古墳の溝と推定される遺構が検出され、古墳時代の墓域と推定される。この墓域の北側は古墳時代集落域となり、竪穴住居、掘立柱建物が50棟以上検出されている。今年度の調査区はこの集落域の北部に相当する。

**調査の概要** 今回の調査では、上下2面の調査を行った。上面では古代以降の遺構を確認した。主な時期は古代および中世で少数の土坑等が検出された。全体として遺構の密度が低く、明確な集落は確認できない。下面の遺構としては古墳時代前半の竪穴住居・掘立柱建物群および溝群を検出した。竪穴住居はA区で8棟、B区で19棟、掘立柱建物はA区で4棟を確認した。平成19年度の調査では40棟以上の竪穴住居を検出し、集落の中心と推定される。今年度のA区では竪穴住居数が減り、密度が低くなるが、B区では絶対数、密度ともに増える傾向となる。集落が北に展開し、別の中心が存在することが想定される。竪穴住居は周溝の幅が数十cm～1mとなる本遺跡に特徴的な形態のものが検出された。床面上に炭化物層がある竪穴住居が多く、炭化した建築部材が倒壊した状況の焼失住居が確認された。これらには床面上に土器がまとまって検出される例が多い。また特徴的な遺構として集落に先行する溝群が検出されている。幅が最大60cm深さが最大40cm程度で、数条が一定間隔で平行して直線的に走る特徴がある。A区南部では溝群が直行して切り合っている。溝の埋土中からは遺物はほとんど出土しない。古墳時代前期で集落に先行する時期の農耕に関わる遺構と推定される。また、遺物が比較的多く出土する溝が検出され、時期的にこれらの溝より新しく、直角に屈曲し、性格的に異なるものと予想される。その他の時期として、弥生時代の壺形土器が集中して検出された落ち込み状の遺構がある。明確な掘方が認められないため、自然面に土器を廃棄した状況と考える。

**まとめ** 今後、古墳時代前期の集落の広がりをも明らかにすると同時に周辺の古墳との関連を検討することが課題と考える。(酒井俊彦)



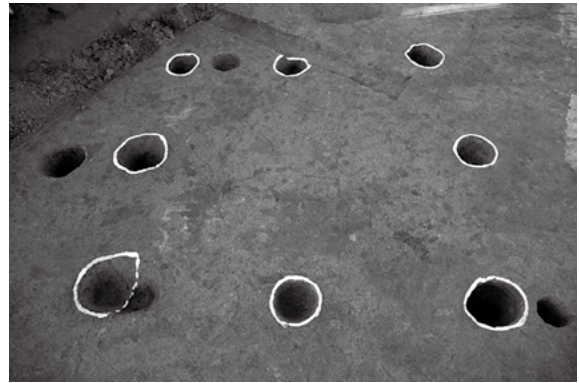
遺跡遠景 (南から)



A区全景 (南から)



竪穴住居



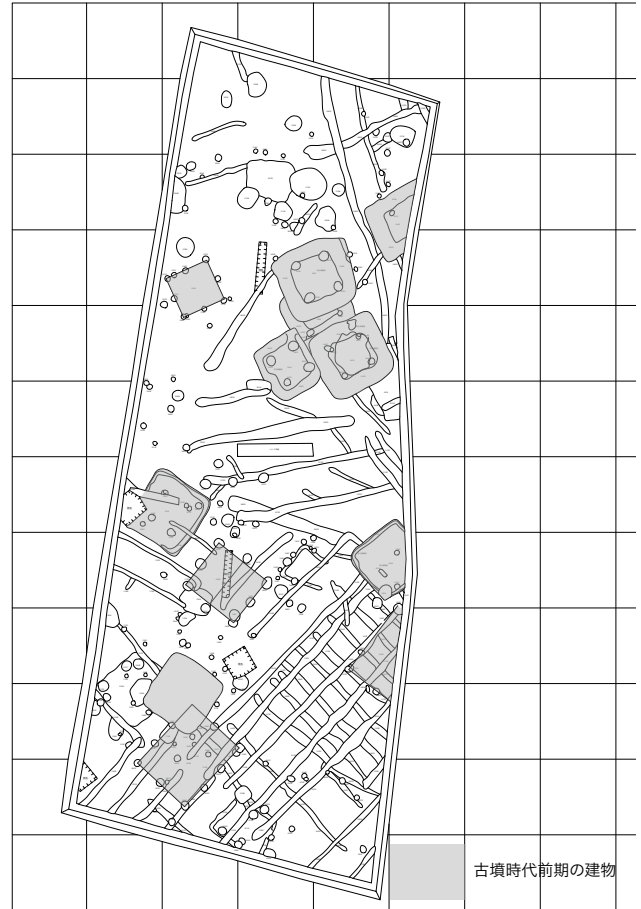
掘立柱建物



溝群



弥生土器出土状況



A区遺構図 (下面)

古墳時代前期の建物

そうさく  
惣作遺跡

所在地 安城市木戸町  
(北緯34度53分59秒 東経137度05分38秒)

調査理由 床上浸水対策特別緊急事業(鹿乗川)

調査期間 平成24年11月～平成24年12月

調査面積 330㎡

担当者 酒井俊彦



調査地点(1/2.5万「西尾」)

**調査の経過** 本調査は鹿乗川改修工事により床上浸水対策特別緊急事業にともなう調査として愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて本センターが委託を受け実施した。昨年度は本調査区の北側2,200㎡を調査し、古代の竪穴住居6棟等を検出した。主な遺物としては、古墳時代から古代の遺物が出土した。この調査で調査区南端に旧河道が検出され、湿地性堆積物から古代の木製品が出土した。このため調査範囲南側に遺物包含層が存在する事が予想され、今回の調査に至った。

**立地と環境** 本遺跡は矢作川下流域左岸の現鹿乗川に沿う沖積地に立地し、旧河川が形成した微高地上に所在する。遺跡南端に古代以前の旧河道が東西に走り、この南岸の自然堤防上も遺跡範囲となる。遺跡西側は現鹿乗川が南北に走り、この西岸は碧海台地の東辺にあたる。東側は鹿乗川に平行する用水路で、これを挟んだ東側にも本遺跡は展開する。これまでの調査により、弥生時代、古墳時代、古代の集落等が確認されている。今年度の調査区は鹿乗川と水路に挟まれた区域で、南北に伸びる二つの堤防の間に設定された。遺跡の現地表が標高約8m、遺跡の主要検出部分は標高6～6.5mである。旧河道の調査最深部で標高4.5mとなった。

**調査の概要** 今回の調査の区域は東西に走る旧河道の南半分から南岸の自然堤防の頂部に相当する。遺構は2面あり、上面は現表土の洪水性堆積層である粗砂層下の青灰色シルト層面で標高7m、下面は旧河道自然堤防の白色シルト・細砂層面で同6～6.5mである。また、自然河道の湿地性堆積層の掘り下げを行った。

上面では、近世の土坑2基を検出した。大形方形土坑の細礫を主体とする埋土中より、19世紀前半の土師器、瀬戸窯産施釉陶器、磁器が出土した。この面から掘り込まれた溝が下面の旧河道の埋土上面で検出された。溝は自然堤防に平行して東西に走り、横断する杭列と俵状のものによって構築された堰が検出された。溝は検出面から深さ約0.8m、上面からは深さ1.9mを測る。土坑と同時期と考える。

下面では自然堤防上の基盤層面で整地層が確認された。10cmの層厚でシルトを主体とするブロック状でしまった土層である。須恵器片がわずかに出土している。遺構としては土坑、溝が検出された。自然河道の埋土は上層が灰色シルト、中層が黒褐色腐植質土、下層が白色砂質土である。中層の湿地性堆積土より木製品および加工痕のある自然木が出土した。主なものでは板材、表面を削った丸太材などが検出された。その他の遺物として、上層から古代の瓦、中層から須恵器が少量出土した。出土遺物から土坑及び溝は古墳時代後半から奈良時代、自然河道の埋積時期は奈良時代以降と考える。

**ま と め** 今後、遺跡の形成に関してボーリング調査など地質学的調査の分析成果を含めて検討を行う事が課題となる。(酒井俊彦)



近世 溝



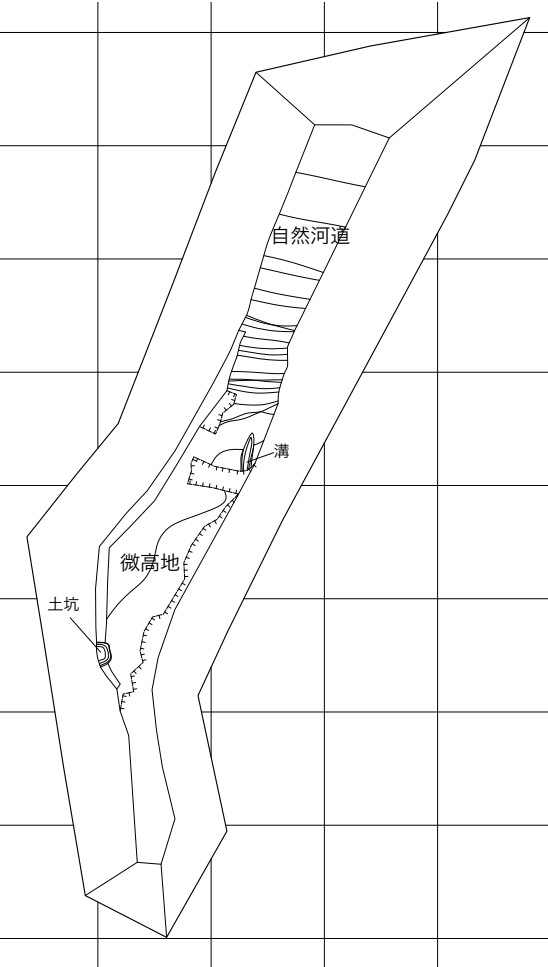
木製品 出土状況



古代 木製品



調査区 北半



調査区全体図(下面)



調査区 南半

## 範囲確認調査 のぞえ 野添遺跡

所在地 豊橋市石巻本町野添・西下地  
(北緯34度47分55秒 東経137度26分15秒)

調査理由 道路改良工事(主) 東三河環状線

調査期間 平成24年6月

調査面積 200㎡

担当者 松田 訓・永井邦仁



調査地点 (1/2.5万「豊橋」)

**調査の経過** 調査は、主要地方道東三河環状線改良工事にかかる事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。遺跡のうち事業対象地となる約2,000㎡に対して2m×10mを基本とするトレンチを総数19か所設定し範囲確認調査を実施した。過去には県道北側の玉川小学校地内で昭和57年度(1982)に豊橋市教育委員会が発掘調査を実施している。

**立地と環境** 遺跡は、豊川左岸の河岸段丘上に立地し、その南縁は石巻山方面から西流する神田川右岸に接する。神田川沿いの低地には昨年度当センターが10,630㎡を発掘調査した東下地遺跡が立地する。

**調査の概要** 今回の調査では、事業地の縁辺に沿って16か所のトレンチを設定し、さらに攪乱などの状況を確認するために事業地中央にも3か所のトレンチを設定した。うち北端(T.T.1)のみが全長20mと長くなっている。地層は、表土・包含層を約50cm掘り下げると基盤の黄褐色礫混じシルト層があり、その上面で遺構検出が可能であった。結果、ほぼ全てのトレンチで遺構・遺物を検出し、古代・近世を中心とする各時代の遺構がほぼ全面に残存していることが予想された。

T.T.1では中世から近世とみられる幅約2mの大溝が検出された。断面は箱葉研に近く、屋敷地区画としてもそれなりの格であったと思われる。この大溝は南へ延びてT.T.3でも一部が検出されている。T.T.3では明瞭な竪穴建物の隅部が検出された。上位の包含層からは8世紀末から9世紀前半の須恵器が多数出土した。このような竪穴建物の遺構はT.T.7、やや不明瞭ながらもT.T.4でも検出されており、台地上に広く展開しているものと思われる。T.T.4・9・12・16～18では掘立柱列が検出されたが、遺構内は掘削していないので時期は不詳である。概ね古代と近世の可能性が考えられる。T.T.14は南縁斜面にかかるトレンチであるが、台地上から造成などで崩落した土の中に古代の須恵器・灰釉陶器が多数含まれていた。しかし同様に設定したT.T.15では、唯一遺構・遺物ともに検出できなかったが、基盤層の断ち割りを実施し、上位の粘土層から下位の円礫層までを確認した。T.T.2・8など県道沿いのトレンチでは削平や攪乱もみられたが、概ね基盤層の状態が良く、ここでも遺構が濃密に展開する可能性が高い。

過去の発掘調査では、当該地点より北側で中世末・近世初頭の遺構・遺物が検出されている。このことから、台地奥部まで近世集落の広がりが想定されていたが、今回の調査では、台地縁辺近くで平安時代を中心とする時期の古代集落が展開している可能性が高まった。また、遺物には古墳時代初頭のものも若干含まれるので、当該期の遺構も想定される。

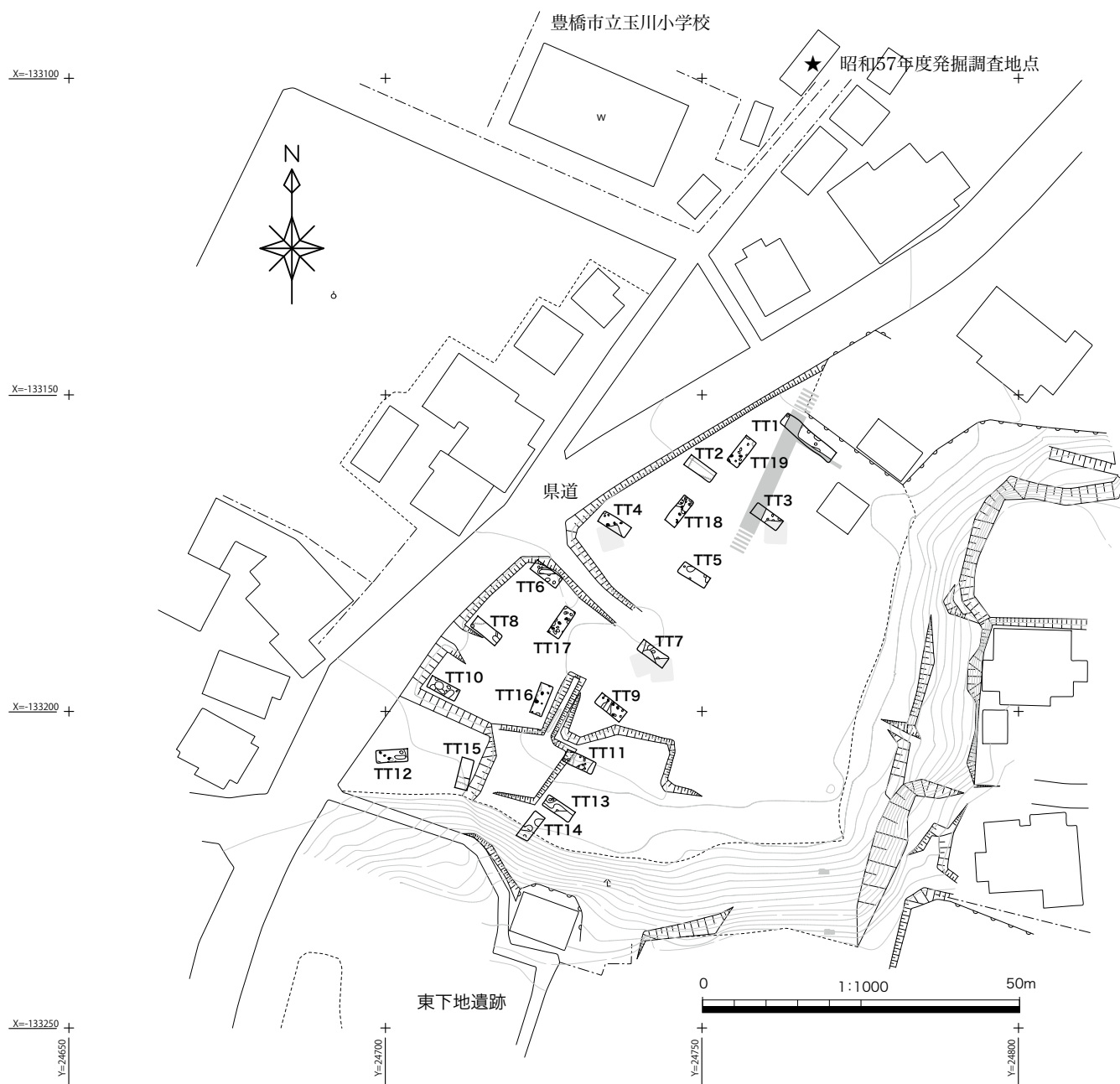
(永井邦仁)



全景（南西から）



TT03(南東から)



野添遺跡範囲確認調査トレンチ配置と成果概要

ひがししもじ  
東下地遺跡

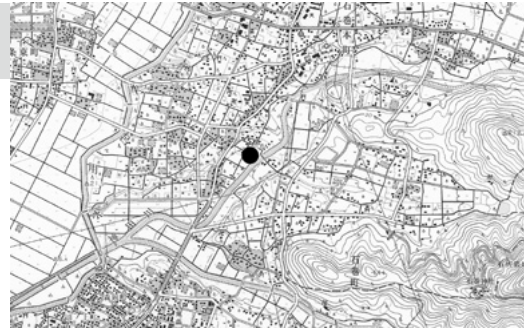
所在地 豊橋市石巻本町東下地ほか  
(北緯34度47分52秒 東経137度26分16秒)

調査理由 道路改良工事(主) 東三河環状線

調査期間 平成24年7月

調査面積 274㎡

担当者 松田 訓・永井邦仁

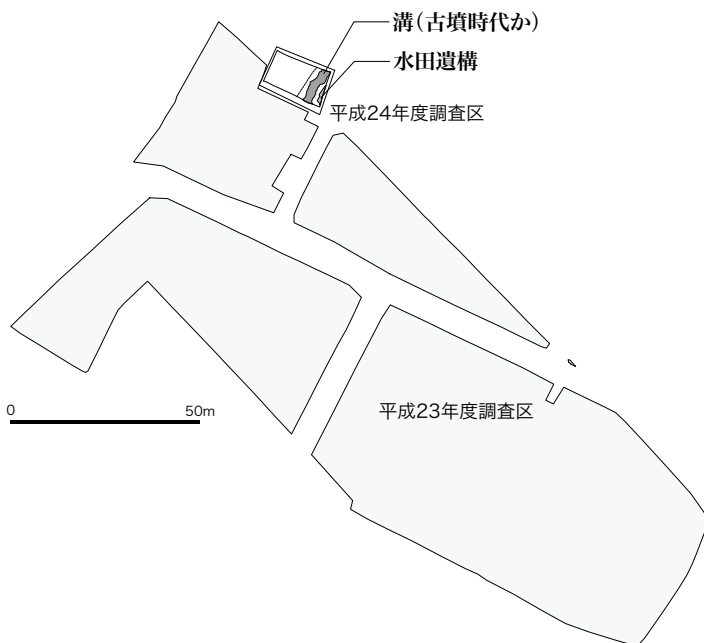


調査地点 (1/2.5万「豊橋」)

**調査の経過** 調査は、主要地方道東三河環状線改良工事にかかる事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。昨年度当センターは10,630㎡を発掘調査し、弥生～古墳時代の水田(畦畔)や、中世の土坑墓、掘立柱建物などが検出されている。

**立地と環境** 遺跡は、豊川左岸の河岸段丘南縁崖下に位置し、神田川右岸の低地に立地する。この低地は神田川の流路変動による影響を受けやすい環境にある。

**調査の概要** 今回の調査地点は昨年度調査区の北西隅にあたり、野添遺跡のある台地縁辺に近い地点である。南側と西側が既調査地であり、特に南側でみられた水田遺構とそれに伴う溝の延長が予想され、調査区東端付近で水田遺構と溝が検出された。溝は礫を多数含む水流の影響によって各所で決られ不定形である。遺物は摩滅の激しい土師器小片が若干出土したのみで古墳時代の可能性が考えられる。溝の東側に水田遺構が検出されたが出土遺物はなく時期不詳である。一方、調査区西半部は段丘崖の斜面にかかり、耕作地化などで削平されているため遺構は検出されなかった。(永井邦仁)



調査区位置と遺構概要



調査区全景 (南東から)

# 設楽ダム工事関連遺跡範囲確認調査

にしち ひがしち  
西地・東地遺跡

たきせ  
滝瀬遺跡

所在地 北設楽郡設楽町大名倉字西地・東地、八橋字タキセ  
(北緯35度6分40秒 東経137度32分40秒、北緯35度7分10秒 東経137度34分55秒)

調査理由 設楽ダム工事

調査期間 平成24年10月～平成24年11月

調査面積 120㎡

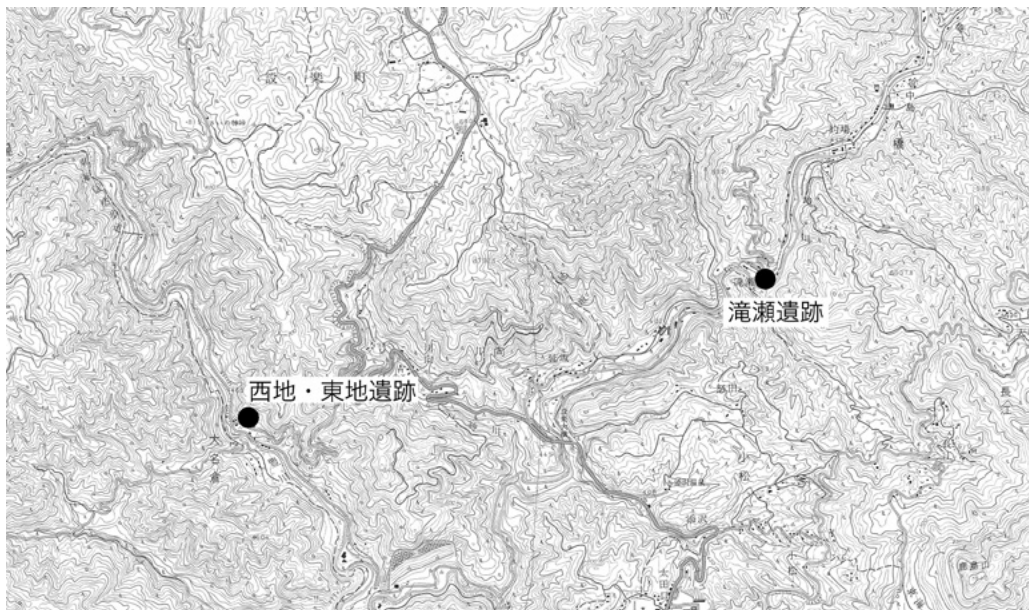
担当者 宮腰健司

**調査の経過** 調査は国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事に伴う範囲確認調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成24年10月～11月にかけて実施した。調査では、県教育委員会の分布調査の結果を受け、西地・東地遺跡31ヶ所、滝瀬遺跡26ヶ所のテストトレンチ(T.T.)を設定した。

**立地と環境** 西地・東地遺跡は標高約455～465mの寒狭川左岸の山麓緩斜面および河岸段丘面に、滝瀬遺跡は標高約420mの境川右岸の河岸段丘面に立地する。

**調査の概要** 西地・東地遺跡では3地点にテストトレンチを設けた。東地点では礫を多く含む谷地形の堆積を検出し、縄文土器、山茶碗、江戸時代後期の陶磁器が出土した。中地点では石垣と思われる石列を1ヶ所、石積みを2ヶ所検出したが、所属時期は不明である。戦国時代の陶器・播鉢・土師器、江戸時代後期の陶磁器が出土している。西地点ではT.T.29で3基の土坑を検出し、うち02SKより縄文土器が1点出土している。その他、古代の灰釉陶器、戦国時代の陶器・土師器、江戸時代後期の陶磁器が出土している。

**滝瀬遺跡** 滝瀬遺跡では、平成19年度に範囲確認調査を行った地点の西側の水田部分にテストトレンチを設けた。その結果、東側の17ヶ所のテストトレンチにおいて縄文時代早期～後期の土器やスクレーパー・叩石・磨石・石核・剥片などの石器が出土している。また7ヶ所のテストトレンチで土坑・落ち込み・高まり状遺構が検出された。さらに遺物・遺構が確認されない西側については、ゆるやかに落ち込む地形となる。(宮腰健司)



調査地点 (1/2.5万「田口」)